



共 育



上の黒板は、5年生が日々の授業をよりよくするために話し合った記録です。

日頃の自分たちの教室を思い浮かべ、今以上により授業を創り出すにはどうすればいいかを真剣に話し合っていました。

瑞穂小学校の高学年は、授業は先生と自分たちが一緒に創り上げるものだと考えています。投げかけられた質問や疑問に、考えが浮かんだ子から自由に立ち、意見を述べます。だから、手を挙げ先生に当てられるのを待って答えるという従来のスタイルではなく、思いついた人から順に考えを積み重ねていきます。黒板の内容からも分かるように意見交換の時間をいかに確保するか、もっと時間を創り出すにはどうすればよいかについて解決策が示されています。

このように 瑞穂小学校の高学年は、自分の思いを伝えることが学級の貢献につながることを実感しています。また、述べやすい雰囲気^{けいちよう}を創り出すために、傾聴する態度も身につけようと頑張っています。「相づちを打つ」こともその一つで、真剣に聞いているよの合図として、学級や学校の中で習慣づけています。

ところで、「相づちを打つ」とは、2人の職人が交互に槌^{つち}（ここでは、金属をたたいて鋭くするときを使う道具）を打ち合い、刃や農具を作り出す動作からきています。片方だけでたたいても均等な力がかからず、刃を鍛錬^{たんれん}することはできないのです。

話し合いも同じで、話し手が一方的に話していても、聞く人が真剣でないと話し合い

は成り立ちません。聞き手が真剣に聞いているからこそ、話し手も誠意を持って自分の思いや考えを伝えようとします。相づちによって、話し手が伝わっていることを実感しながら安心して話せる空気は、聞き手が作り出さなければなりません。一方通行でない話合いだからこそ盛り上がり、絶え間なく新たな話し手が表れるのです。最初は不自然な相づちでも、習慣化することで、自分の素直な思いがこもった自然な相づちへと発展していけばと願っています。

私たちは、よりよい授業を創り出すために、よき話し手・聞き手の両方を育てることを大切にしていきたいと考えています。

<育ち合いジャーナルより>

今日の授業では、前にやった「26人と先生の授業」というものを生かしてやりました。すると、今までより声が大きくなったし、相づちも自分なりにになったのでいいと思います。

私は最近さらにくわしいことを聞きたい時に「…といたしますと？」と言うことが多いです。 (5年 女子)

今日、「いい授業をするには」ということを話し合いました。

いろいろな意見が出たけど、こんなにダメなところがあることも知れてびっくりしました。今の5年生ならそのことを直せると思いました。みんなで協力して先生と26人で授業をつくりたいと思いました。がんばりたいです。 (5年 男子)

『先あいさつレンジャー』『感謝シマット』を

続けることの意義を問う

本校の朝は、『先あいさつレンジャー』の元気なおはようございますの声が始まります。子ども達が自主的に玄関に立ち、大きな声であいさつをしています。

また、登校したとき、校舎に向かい「今日一日お願いします」の心を入れて『感謝シマット』の上で、一礼をして入ります。そして、帰りも「今日一日ありがとうございました」の気持ちを込めて一礼をして帰っていきます。これは瑞穂小学校の伝統でもあり、習慣でもあります。

ところが、習慣は時には本来の意味を忘れ、形だけが残ることがよくあります。そこで、今一度、原点に立ち返り、『先あいさつレンジャー』が発足したわけやその目的、『感謝シマット』の上で行う一礼の必要性などを問い直し、子ども達自身が、習慣となつていくこれらの行いの意義を見つめ直してほしいと願っています。

現在、五、六年生を中心に

『先あいさつレンジャー』『感謝シマット』が受け継がれている意義を考え、その子なりに行動に移せるようになってきています。



感謝シマットの上で